



黃真仲磨  
生死流轉

繪本輪迴物語

遠13  
973  
8





明遠 13  
號 973  
卷 3

本清

安部仲磨  
生死流轉  
輪廻物語卷之三

附 吉備公仁心の事

頃ハ唐の開元六年正月中旬名も高き長安の都華清宮の中央にて  
日本の遣唐使吉備大臣と維州の官人玄東と互に命を賭りの圍碁名乃  
勝負成命せしむ中央正面の大床よ綾羅錦繡の戸張の中玄山白王  
帝の玉座を設置妃揚大真初とて二十六の嬪二十八の世婦其外宮女  
三千人戯眉蟬鬢花容月容空粧の蘭麝余亦の袂も薫むる討り互に  
媚と戯と笑をなりて帝の前後圍碁をまは其御戸張の外画は文武の  
百官次第乱れさむ右初左辺に侍せしむ就中安禄山揚国忠ハ方に眼  
を配り勝負今やと待さるる玄東其日の將衣束の孔甚翼の夜に金銀

輪廻物語卷之三

明遠 13  
號 973  
卷 3



砂の石の帯。右の席は著坐して遣唐使の参内を。今や遅く待居る。暫有る吉備大臣出立のふ粧ひの濃紅の大帷子。黒色の袍を着あひて。金作りの太刀を佩袖挿合せ出らまて左の席に著まう。當り疾拂て見えよる。斯く其日の登壇應善く。美盡して半酣。及ぶ頃圍碁の勝負は望せられ。兼て期しうるも。此の勝負は。御相手は。先づ去し。日本へ渡らざる道あれば。大体の二通り。其理を承りて後。兎も角。いささんと。静まり。先。東進を。先。一面の碁盤を以て。世界一と定め。黒白三百六十目。是は日月運行。表も地取。圍を居る互ひに圍ん。内。西目有る。死を。其大慨を。吉備公既心得。休めて。殷勤に謝を

逐らまらる。斯く一面の碁局は。黒白の子と。先一人の回。直。此時。玄東が妻。隆昌女。今日の勝負心。夫の歎身。附添。始終の安否。度と。殿々の願。兼て。名高。隆昌女。事。御許。酒宴の給仕。事。寄。勝負の様。伺ひ。然。遣唐使。吉備大臣。先。と。あ。玄東。黒字。取。貴卿。客位。其。先。は。んと。お。打。其。碁盤。真中。は。その。打。吉備。思。案。有。玄東。打。石。白。重。と。わ。満。坐。思。を。発。其。碁。石。重。あ。幻。児。の。地。藏。菩。薩。あ。其。其。碁。盤。一。世。一。体。の。盤。上。の。唐。天。皇。も。日。本。も。有。其。一。方。国。の。中。央。に。唐。帝。玄。宗。



皇帝の御位の石を置時、天日本の主たる元正天皇の御位の石を置ど  
 ころ無れた故に、扱てそれある黒子の首の上を置て、と憚る所ありけれ  
 る。これ外、中にも有らる。玄宗皇帝の座前とひ、三千里外の他邦へ渡  
 りて、傍若無人の形勢、一言半句も答へず、玄東も面を赤し、怒黒  
 子、たうあ得て、此方の角を打直せ、吉備は彼方の角を打らる。それ  
 よも双方手段を盡して、次来りて、打たざる。満座の諸人、腕を張角と  
 怒らり、傍觀も、此時、不思議ある。吉備大臣、初て向ひ、盤上をあれども、一  
 手、おとさふ。首尾相顧りて、前後貫通し、魏々連綿として、星の列  
 ある。似たり。玄東のとき、奇代の名、一目半石の無違手あり。たがひは  
 圍む。圍む。圍む。己の七八分は成りたる。隆昌女、初と吉備の妙手を心  
 驚かた。一目、美して、目も放さず、録へて居たり。既に玄東、一目の員と

なる。一目、目算。一目、目も身の大車。兎やせん、角や工夫、凝く。是  
 非、一目の徳を取せん。心の矢、猛り思ひ、業通自在の仲、磨目。目よりぬ  
 助言といひ、神爰、不思議の吉備、心を又も事あれ。今、奈も、隆方  
 あり。好天道の冥冥、身の内、醫者あり。夫の命、代りて。吉備  
 大臣の上あり。黒子の中、一目を。そと、盗を取紙、色こそ。人のまね、間も香と  
 して、熱鉄、九枚、香あり。も、苦く、知りて。斯て、や、あ、一番、作ら  
 して、較らば、見ま。隆昌女、目算、少くも、遠く。双方、互に、優劣、あ、對其  
 こそ、極り。帝を、初め、奉り。一座、の人々、大に、感して。奇哉、妙哉、い、神が、加護  
 本へ、渡らぬ品を、五口、國は、名人と、呼ぶ。玄東と、對其、あ、神が、加護  
 所為、た、凡夫と、思ひ、驚き、と、驚歎、の、声、暫く、鳴り、止まらる。斯て  
 黒白の子と、扱て、一、く、教へ、黒子、一、不足、けれ。此、の、ふと、尋ぬ



れども隆昌女が前々隠せしと再び出せられ様もあらず然るに其一石若去東  
 が方々先ひし事を其の勝負の沙汰は拍とせられども若し吉備公の考  
 めて失ぬまは去東一目の員とあるゆへ去東吉備公を初め其の席は  
 寄し人々懐中より袂まで隅々向々尋ねられども乃た吉備公進  
 山出て下るに其の初発ありし不足有つらん。後出するも何とせん。惟此  
 捨置置まはし寛仁大度の一言は感せぬのの無り。此時安禄山隆昌  
 女と此と目を付進を出て下る。今紛失の黒子其終て事を流し時  
 へ此席は無りあるべけれども。後日の比判をいへせん其故の不足の石山出  
 吉備氏の難多とあるまはれども去東が負とならんを恐れし。まこと穿  
 鑿をとげざると他国の沙汰は預る時其負偏頗の取針らひと嘲  
 を受るる。国の耻は是非を詮を遂るまはし口を言と心は先年

隆昌女が帯りんと平東の文と贈れども去東へ席をまき一度の返事  
 も無りしと深く憤り居たり故其恨を暗さん為と他へ知れし隆昌曰  
 女は心よそを怖れども自ら作せる罪科の嚴しき詮は逢時大の命  
 は係る大事に消え入度風情なる深き子細を一座誰有る知らねし  
 只安禄山がせし理の當然と思ふは尙も敵慮を伺はれ帝遣  
 の聞し召し遣唐使が如く詮を我残きの温和の道仁政の一端ありん  
 然るに安禄山が言の如く其終お捨て時其負の沙汰は落し  
 後日の誹謗悔もせん。然らば一通の詮を山に上り別は身  
 鑿の手段も有はし爰は幸ある我宝庫に藏め置古善院が用し明鏡  
 懐中を照し見し時其有無分明は知るべし時の一負ありあは吉  
 備氏の馳走詮の手段両あらず全れ道理早疾くその命は隨ふ互









吉備大臣安祿山を  
説破し隆昌を  
救ふ圖

車苑外言部



入りて氣色なれば士口備は重て男の羞恥を用ひて是非の詮を及ば  
とある上六不肖あぐら今日團基の敵手たる其心又他人の吟味を任かす我  
鏡の中に見届て疑ひ晴さんいふをこれ成給仕の女に恥もさり有  
遣唐使か心を察し明小吟味を受て天扣大唐地の思とて寄り着る人  
鏡に向られしと言言言まぬ仁の言改る人の意は仁心有と名を便鏡の  
六寅や美陀が残せて明鏡隆昌女が衣裳の隈々も胸の裏腹の中隠す所  
の有るを然るに上腕を中腕迄の間に其名字やとある思れぬ紙の色く妙り  
て弁の降るるといふれ女は我あぐら法猿しく免やせん角やせんと思ふ内遣  
唐使ハ稍暫中ぢらるれもせむお守りて御座せしが取早地女は怪美いふし  
黒字を隠し取る事疑ひ晴らると有る六隆昌女が心のうまくとて  
の喉節の口不思議ものぐま心地して

高声よ中をれ女其所らうか今汝が腹中よ五藏を放て明くと思く團丸  
のく昇降する夫の命の命の目の負成救り人為竊盗之奪これども  
置れの無れする吞隠する疑あり早々せ偽とたの拷本の責を掛た  
ぞとまるとはあとも隆昌女の針の席は坐まると如くうらむわたり居る  
る此時士口備さ柔和の相貌引く両眼活と見開きさひ安禄山をた  
と覗く居長高はあつてりされたる尾籠あり安禄山今日團基の敵手  
あつたゆふ詮美成遂る某をさう置外より吟味の助言を尤以狼藉あつ  
且取前より女ハ隠さる有と言と足下何と聞かひこれの女腹中  
臟腑の外も思く團丸りのえとて文官愚昧の肉眼も其を思  
べけれ畢竟そま心の邪事と左右よせても此女を罪は墮さんとあふ  
眼の料に其故ハ胎家未分鋤ふ女人懐胎の始め父の精母の胎よ入とた







兼て我慢の安祿山。今日諸卿満坐の中にて、足下の為は耻しめらば、  
 を深死恨らむや思ひらん。明日の雅題は、相承ある勝負、昔東なりまこと。  
 野馬其堂の詩といふのを出して、足下の読めと能く恥しめて人  
 の恨み晴し、蘆菰内傳を渡りて、其手段せん、評定之然り、凡野  
 馬其堂の詩は昔宝誌和尚の作文なりといひ傳令く、五言十二韻字、教僅  
 二百二十字なりといへども、字行假横錯乱りて、何まの文字あり、積始  
 何まの文字ゆて、読終るや、その順逆をまがらうして、古来よむ人、  
 なりとぞ。我明日業通を以て、又のや足下、成助らんとおのれども、帝の  
 在り上段は飾とあれ、十善万乗の位は怖を近づく事、のあつた。  
 今ハ我力も及び難し。たゞ此上ハ神明は祈りて、危難を免がまこと。  
 あら口惜やとむらうに、か死消をこく、矢もたつ。古備公、惘然として、

為死やうあ。忽ち東の方に向ひ、兼く頼し、長谷寺の天慈大悲心の  
 觀世音の読ぶ、死を脱せ、明日の危難を救はまこと。若しむ事、のあ  
 らざる時ハ、我一人の耻も、日本末代、その耻辱なり。仰ぎ願く、大悲應  
 護の御誓、歴劫不思、後の力を以て、我危う死を救はれと、丹誠を描て、  
 祈り、これハ感應や有ららん。忽ち大悲尊、老比丘の形と現れ、香湯の御  
 衣ハ、大悲の泪を垂り、善哉汝、国家の為ハ、忠誠を盡し、事我、明日、微小  
 の蜘蛛となりて、梳へた文字の上は、顯る。金色の糸を引て、渡る。其の間、其  
 行跡、後ハ糸を追て、梳へた。一言一字の滞りあり、悟意、文字、是ハ、余  
 まで、開朗、明然と心は、浮ん、疑ふべからず。と、言終る。矢も、古備公、余  
 の雅有、御跡を伏し、拜し、実り、以て、種々、形造、諸國王と、兼て、の、  
 等が、為り、浅様、死虫類と、中て、あり、あ、の、勿休、死事、なりと、渴、御、



喜の涙とくも小猶も並言願及べり。尊るるも更にもなり。

野馬基の詩

安祿山再度吉備公を害せんとする時

斯く翌日早天あり。吉備大臣召應じて奈内をよげられり。公卿大臣も昨日勇敢の形勢もや恐まてう先誰一人兼心も言哉山を者時

帝より仰出されり。昨日維州の玄東と圍其谷の争ひたがひは優劣を分る間望の秘書を渡さる由あり。依是今試とて読むる文

昔漢の宝祐和尚行道の一人の化女忽然と来りて物語事。旧相識のどく暫くあて立まへ。又一人の化女来り来去都合一千八人の女皆

日本の終始を語まろ。和尚あやう事おあり。千八人女を以て文字お作らば。倭字とある。扱ハ倭国の神なるなり。最も尊ぶるに思ひて其物語事と記し。五言十二韻二百二十字。よき日本の未記にして

野馬基の詩と名付然も文字紛乱縦横錯雜古よ絶て是

を読者あり。然るも汝世は類ひあり未才といひ。殊り日本の事と記し文章あり。若速く是を讀得る事あり。其時こそ蓋も奈内

傳金鳥玉免集の一書。元は應じて渡さん。少くも相後有る。頃て螺細の文基も玉軸の一卷用紙を。上段王座の側にも。巖重は飾られ

る。吉備公欽領掌。仰て野馬基の詩一覽するに。字ハ一々分明あり。後を讀横は讀或は逆さぬ。又ハ斜な心を盡して讀下せ。執

隔る痒を搔ぐとく。順逆の次序更に分らざる。堪ハ口惜やと一心。佛天の加被力増たると。観念して眼を開き奇哉妙哉大悲の旅言

ひあやまちのほど。忽ち一つの蜘蛛あられ。詩の中央ある東の字へ。金色の糸引く。落る。吉備公あまの。難有る。夢知の心地。糸



つれあはし  
あはれ  
こころうち  
いん  
こ  
つ附跡を追う心の中に吟ぐ見まは

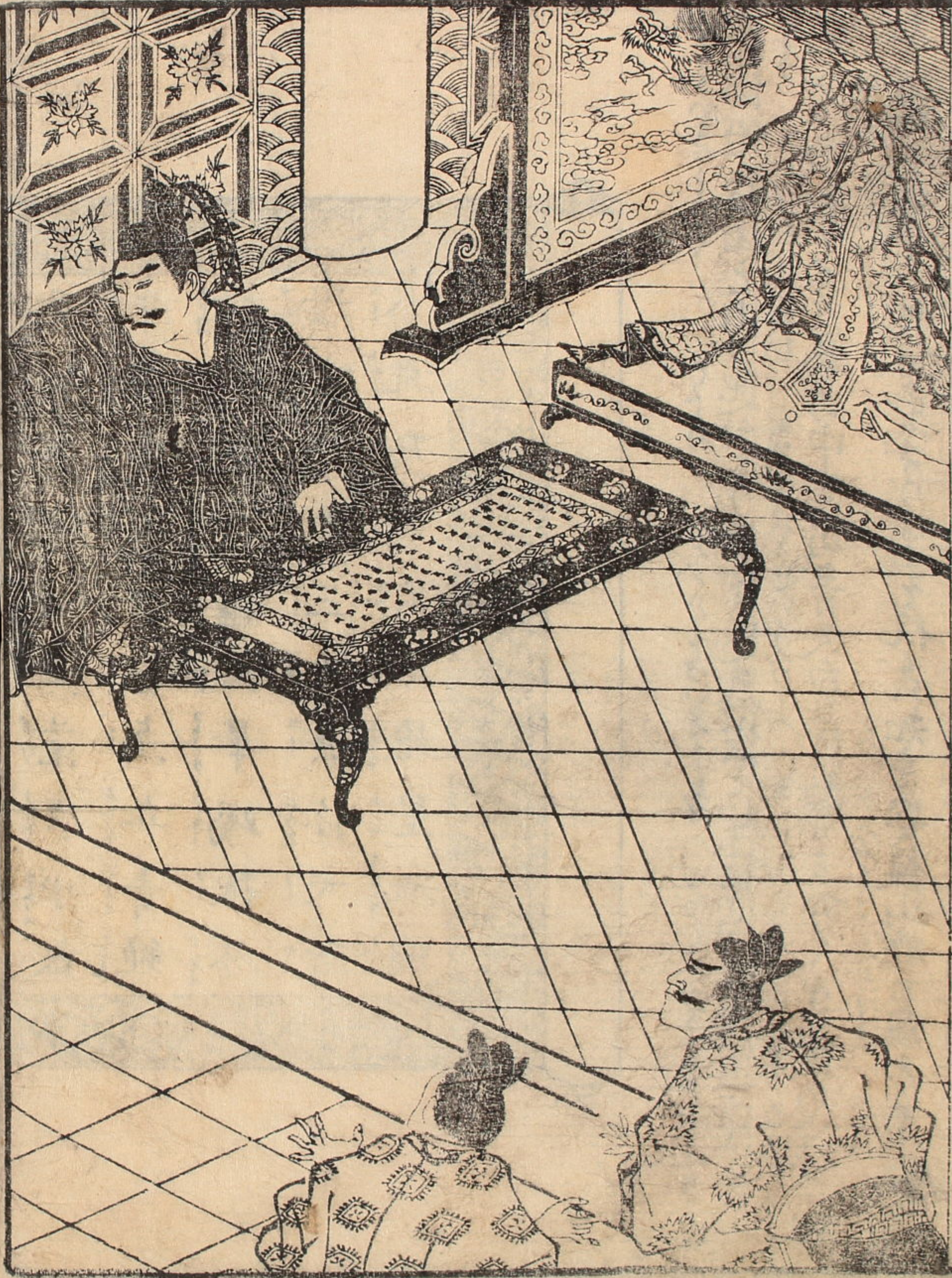
野馬基之詩

始	定	壤	天	本	宗	初	功	元	建
終	臣	君	周	枝	祖	興	治	法	生
谷	孫	支	生	羽	祭	成	終	事	衡
填	田	奥	膾	翔	世	代	天	工	翼
孫	子	動	戈	曷	百	国	氏	右	輔
昌	微	中	干	後	東	海	姬	司	為
白	失	水	寄	胡	空	為	遂	国	喧

竜	游	窘	急	城	土	茫	々	中	鼓
牛	食	久	黄	赤	与	丘	青	鐘	
勝	角	黒	代	雞	流	畢	竭	猿	外
丹	盡	後	在	三	王	英	称	犬	野
水	流	天	命	公	百	雄	星	流	飛

東海姫氏国とある起句より。是れは遂為空といふ結句に至る迄字義分  
 明く初て雲霧の中と出。青天白日は觀るが如く。喜悅の涙は袖  
 を濡し。暫く乾くもあさうたる。それと知を安祿山昨日耻を蒙り其





吉備大臣野馬臺の詩を  
讀んで奉朝の賢才と顯せ必





鬱憤を暗さんと云ふも古備公知を知と爲し不知とせずと云ふ聖人の教読得ざるの荒むといふも推し朝々め有る帝の玉座間更其所は長坐却て恐る有早々其所をよと権柄は耻しむれ古備公知と笑ひぬひく二六珍し其良と承るものも其今野馬臺の詩を三覽して大荒るも荒るも有無の言を發せざるに退去あれ無礼の言殊我生國ある日本の未来記とある是荒流ん物物教あるも若連望とあら宗皇帝の御前於て字箋一々小註解せん何の難きものあえん其下一通う荒下を聴聞して少く漸愧を知ぬと五言二十四句一三二高声は流下せし一編堂々として水の流る如く一字半點の復々其帝を初まり公卿殿上人未々の者に至る逆舌を振る大驚死鬼神歎も人間は有すと感歎賞讃の聲堂上堂下響け渡り響けハ鳴り

止ざらるる。されば蔵感の餘り約束の如く蓋蓋内傳の一巻其他儒書佛書教多賜るべし旨命せしむ傾く退出いさされ六国の答を異国に顯し名を後の代に通する古今無敵の英才も是は保佛天神の加護して例せたるなりと斯く程あく金鳥玉兜集其外種々の珍翫雅器と鴻芦館にて贈り賜り明朝未明は風渡の津を出帆あるは極つる此時安禄山揚国忠の密計畧を標し合世殺害せん計り術計悉相遠しと古備公知と名譽を顯り勅定の上無憂小版朝まるとあるは朝廷珍蔵の奇書空しく他国の宝とあえん惜ぶたの才一も短手小紙於殺して二つ我々が遺恨を晴し二つ蓋蓋内傳の秘書と奪ゆん千思万慮只是一皮せり明早天子鏡を解き出るとの事あれ人知し今夜の中ふ人教を集め明曉出帆の折を伺ひ密に討く棄べしと彼是



用意も及りぬ。云東が妻隆昌女密願の義は付く。并顔を得度。夜  
 中あつ推泰せんと。あつた案内。安禄山揚国忠。互目と目と見合  
 せて彼奴女あつても油断あつても且昨日吉備大臣が情は依く助も  
 今夜の密計さうなれ。吉備氏が方渡聞へん計難し心して彼も情  
 らまのふあつと互に戒め戒めと願く隆昌女を呼出し願の助と尋  
 しに隆昌女双眼あつ流る涙と押拭ひ扱も賤妻が願と。夫東昨日  
 禁廷に於て遣唐使吉備大臣と園其の勝負不及。外勅許を蒙つて出  
 身の其道いも不案内ある日本人と對其若小おは是生涯の耻辱し  
 人の面を向らまむと云来思直ある心より。何の向も一通の書簡小言を  
 遺せし。縁きて遂身没せらる。此何とせんいふと声に限る。蹄泣  
 し折ら承まむ。吉備大臣は林中の首尾残る方あく所望の秘書書にて

賜て明日ハ早天より。飛出の由聞始し。口惜と彼人由えは夫の最期妾  
 為富の敵あつ。御免を蒙り。妾女の一念恨の一刀本意を遂し。後  
 へいつある罪科は處せらる。露不駄身の覚悟。表と思つ。あつて許し給  
 り。此厚恩。幾世経るとも忘ませし。日頃ハ男も及ぶ。智畧小未あり。身  
 れども。夫は別れて悲し。取乱し。雲髪や眼血が。手あひ。心  
 浩る顔色。安禄山揚国忠。是をよ。死幸と。思ひ。ん。小頼母。死汝  
 が負心願の次身。屈らぬ。其上。論言ハ汗の如く。前約。黙止。難。子。あ。つ。く。  
 禁中無二の室を渡せし。なれ。実ハ帝も惜ませ。奇書ある。夏を奪  
 得く。献づ。時ハ夫の最期も大死あ。去。あ。吉備大臣ハ智勇。其。情。あ。  
 豪傑ある。若仕損。と。一大。今汝が斯。夫を。負。弟。は。あ。つ。く。  
 奇書を奪は。二十余人の兵を。汝が加勢と。ま。あ。朝懸。夜討。臨機。應



變時刻を延ぎ討取と願ひ聞濟のこゝろに烈下知隆昌女禮  
 謝を速る暇もあく。此雅有と計りて。十余人を引率し。明日未明に押  
 寄て戰場へ風渡の津。吉備氏の首我取。夫の具を奪ふ。蓋蓋の  
 書に禁廷へ愛度納め奉らん。御心易く思召と悲歎の気色引替。勢ひ猛  
 小出立し。勇しくこそまゝなる。此時一も安祿山の世は。双ひ無れ智者あり。後  
 已ま邪曲の欲。迷ひて隆昌女本心は深き。計畧の有を知らず。彼が承  
 引上らる。吉備の細裏の奥へと揚国忠と楮共。安堵の酒宴。一夜と深し  
 遂に吉備氏追討の沙汰。身す。天の命の然り。むねに。豊人の及所。あや  
 隆昌女義死。吉備大臣改朝の事。  
 此時吉備大臣の昨日と。今日迄。兩度の危難を逃ま。佛天神力の加  
 護と。六言。其源の安部氏の神。我を助。非ざる。此のど。

至りんやと鴻芦館に於て。終夜其具我。祭。既。五更の頃。あも成。はれ  
 頓て長安の都を出。維時。開元六年。正月。中旬。な。斯。其。日の。午  
 過る項。風渡の津。小。至。ま。れ。今。殺。帝。と。賜。つ。金。鳥。玉。兎。集。と。般  
 中。移。奉。其。身。も。已。に。棄。移。ら。ん。と。あ。折。箭。濱。辺。の。砂。と。馬。蹄  
 小。號。立。通。計。其。勢。一。十。余。人。押。寄。り。其。中。是。大。將。と。覚。り。た。女  
 武者。振。り。乱。し。る。鬘。髮。の。白。綾。の。鉢。卷。一。丈。有。余。の。白。柄。の。長。刀。馬。の。平  
 頸。引。付。く。陳。頭。頭。出。大。音。声。呼。り。り。遣。唐。使。暫。待。多。是  
 雅。洲。の。官。人。玄。東。妻。の。隆。昌。女。扱。も。先。日。夫。玄。東。圍。碁。の。勝負。の。分  
 ら。ざ。う。と。面目。あ。れ。思。ひ。結。再。度。の。勝負。我。願。り。ん。と。思。ふ。間。も  
 帝。の。敵。慮。う。ろ。く。蓋。蓋。の。扱。書。後。賜。り。て。改。朝。の。勅。許。り。家。の  
 聞。悔。し。の。り。を。も。然。る。を。あ。め。く。存。ら。ひ。あ。らん。の。耻。も。耻。を。重。め。る。道。理。









舟内

仲麿  
隆昌女  
か冥王  
とち  
免集  
はあり  
國



舟内



多の從者諸共、頗く船中ふあう移り、覺解く出づる。折しも正  
 月廿日頃、東風を吹くに烈しく、帆揚事とあつて、怪れたる風  
 忽ち西に變じて、船の中央、蓋蓋内傳を納し、所の上は當り、隠るる二  
 人の姿、安部仲磨、隆昌女、恰も沈墨して、画き、如く朦朧として、顯く  
 吉備公堂とあつて、驚歎し、忠臣死後、至るまで、本国の空を慕ひ、主婦  
 生前の言を、妻せ、て我を送る。比、是國の福と、遂に船中へ二人の灵  
 を送る。如在の禮を盡し、同年夏の初め、海上無滞、日本の地は、看岸  
 せり。維時元正帝の養老二年、當り、是より、儒書佛經の  
 類、ハ言も、さらたて、圍其各、双六の遊具、に至るまで、初く我邦に、さうんあり。  
 然る、小蓋蓋内傳、金鳥玉兔集の一書、ハ仲磨の子、満月丸と、あつて、禁  
 廷へ獻上らる。安部家再興の候を、計らんと、思され、其頃、満月丸の在

所曾て定り、あつて、故に、已ことを得、と奏聞の上、勅命、依り、吉備氏  
 の家、是と預り、奉り、あ然き、仲磨公の身、取て、いけ、ける本  
 意、無かるに、思つんと、深く、憐れ、家の室と、せ、神、奉り、大元尊神  
 と号し、吉備公、手自封し、あひて、安部家再興の時、非、むん、の子々孫々  
 に至る迄、私、是を、披くべ、む。若、程、披く時、ハ、神、丹、立、所、は、家、さ、べ  
 と、嚴しく、慎戒を、遺され、信、多の、程、を、頼、母、し、然、る、は、程、あ、元正  
 帝、御位を、退、させ、あ、御代、替、り、四十五代、聖武、皇帝、と、奉、り、一向  
 仲磨を、信、い、あ、ひて、曆道、の、御沙汰、ハ、無、く、後、四十六代、孝謙、帝、の時、ハ、初  
 て、加茂、の、姓を、賜、り、家の、奉、言、を、揚、し、付、是、非、は、満月を、尋、出、して、仲磨  
 生前、の、願、ひを、満、ち、め、んと、處、々、あ、を、求、る、も、其、甲斐、あ、く、皇、友、ハ、三  
 十年、の、星霜、を、経、り、室、龜、六、年、冬、十、月、吉備、公、貴、庚、八、十七、歳、老、病



頻に身を侵して。今且夕の期も計と難かれ。二門の人々を残りも枕辺  
 小集め。童れ頭を上と。宣ひらる。抑我入唐の昔。幾度う虎口の難逢て  
 其時死まは死身あり。以仲唐の扶助に依て。危なきをのづき。三千里の海  
 上事あり。皇朝に飯とて。君に用ひらま。下り。敬る。家門日々。蕃昌  
 して。終已に九十小近く。定業。命と終んる。末期の喜びあり。何一思  
 ひ。残さる。有されも。只恨らる。生有ら。ち。安部家の再興を。こころと  
 を。汝等。か。ひて。我遺戒を。ま。安部氏血脉の人と。見る。あ。速。奉聞  
 を。遂て。家興。立の。度。を。封。且。其人の。器に。依て。大元尊神を。讓。べ。と  
 事細。ゆ。言。と。遺。遂に。一朝の。露。と。消。ぬ。知。不。知。押。並。と。惜。ぬ。者。無。ら。う

安部仲唐  
 生死流轉  
 輪廻物語卷之三終





